

平成 21 年 6 月 11 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19720122

研究課題名 (和文) 留学生と日本人学生の親密化を促進・阻害する会話行動の研究

研究課題名 (英文) The Generation of Intimacy:

A Study of Conversational Behavior between Japanese and International Students

研究代表者

大津 友美 (OTSU TOMOMI)

東京外国語大学・留学生日本語教育センター・講師

研究者番号：20437073

研究成果の概要：

本研究は留学生と日本人学生の雑談をデータとし、両者の会話行動を分析することによって、どんな行動が両者の親密化を促進・阻害するのかを明らかにしようとするものである。会話の詳細な観察と会話参加者へのインタビューにより、(1) 相手に好意的・非好意的に評価される会話行動は何か、(2) 中級日本語学習者と上級日本語学習者の会話行動の違いが母語話者の会話行動にどう影響するか (3) 会話の雰囲気を良好に保つための日本語母語話者のストラテジーの一側面を明らかにする。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	150,000	1,650,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：社会言語学 談話分析 親密化 日本人学生 留学生

1. 研究開始当初の背景

留学生の増加に伴い、大学キャンパス内で日本人学生が留学生と接する機会は増えてきているにもかかわらず、両者の友人関係の形成には困難が伴う。日本人学生と留学生の友人関係形成に関しては、これまでは質問紙調査や面接調査による研究が行われてきた。その結果、両者の親密化が困難であることの原因等が明らかにされてきた。

しかし、これらの研究には、以下の二つの問題点がある。第一に、これらの研究は被験者に直接意識を問うものであるため、留学生

や日本人学生から得られた回答と実際の行動が異なる可能性がある。第二に、留学生と日本人学生の実際の会話というマイクロレベルにおける検討がこれまでは十分になされておらず、会話においてどのような要因が両者の親密化を促進したり阻害したりするかについては明らかにされていない。

友人関係の形成は実際のコミュニケーションの積み重ねによって起こるものである。そのため、実際の会話を詳細に分析し、会話行動と親密化との関係を探る必要があると考えた。そこで本研究では、日本人学生

と留学生の会話を分析し、両者の親密化を促進・阻害する会話行動の一側面を明らかにすることを試みる。

2. 研究の目的

本研究は、留学生と日本人学生の親密化を促進・阻害する会話行動を明らかにしようとするものである。留学生・日本人学生それぞれの会話行動を検討するにあたり、具体的に次の三つの研究課題をたてた。

(1) 好意的・非好意的に評価される会話行動

初対面状況で相手にどんな印象を与えるかは、その後の関係の発展に関わるため重要である。そこで、本研究では留学生のどの行動が日本人学生に好意的・非好意的に評価されるか、反対に日本人学生のどの行動が留学生に好意的・非好意的に評価されるかを明らかにする。さらに、予備調査により、留学生が日本人の友人を持った経験があるかどうかよりも、日本語口頭能力レベルの差からの影響のほうが大きいことを予測することができたため、中級日本語学習者（中級者）と上級日本語学習者（上級者）との比較も行う。

(2) 中級者と上級者の会話行動の違いと母語話者の会話行動への影響

相手を疲れさせることなく、円滑に会話を進めることができることも、その後の親密さの発展に関わる要素である。そこで、中級者と上級者の会話行動にはどのような違いがあるのか、その影響を受けた日本人学生の側は、どう自身の会話行動を調整するのかを明らかにする。会話進行において重要な役割を果たす「情報要求」発話と、それに続く発話連鎖に焦点をしばって調査を行う。

(3) 会話の雰囲気を良好に保つための母語話者のストラテジー

日本人学生との友人関係形成に困難を感じている留学生にとって、日本人学生がどんな方法で会話の雰囲気を良好に保とうとしているかを知ることが有効であろう。将来的な日本語教育への応用やソーシャルスキル・トレーニングの開発等も視野に入れ、会話の雰囲気を良好に保つための母語話者のストラテジーについて、基礎的な調査を行う。初対面会話を成功させ、相手に好印象を与えるために、母語話者はどのようなストラテジーを用いているのか。また、会話の雰囲気を損ねる可能性のある問題が顕在化した場面では、どのようにして問題を解決するのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) データ

データは2段階に分けて収集した。第一段

階は初対面状況での日本語による会話の録音で、第二段階は筆者が会話参加者に対して個別に行ったプレイバック・セッションの録音である。

① 初対面会話の録音

留学生と日本人学生との異文化間会話を18組、日本人学生同士の同文化間会話を10組録音した。

異文化間会話に参加した留学生は全員中国出身で、中国語を母語とする中級学習者10名、上級学習者8名である。全員女子大学生で、調査の時点で愛知県のある大学に通っていた。その会話相手となった日本人学生18名も全員女子で、留学生と同じ大学に在籍していた。同学年で面識がない者同士を二人一組にし、空いている教室や学生用ラウンジで約20分話してもらい、18組の会話を録音した。

同文化間会話に参加した日本人学生も、愛知県のある大学に通う女子学生20名である。異文化間会話と同じ手続きで、10組の会話を録音した。

② プレイバック・セッションの録音

会話の録音後、それぞれの会話参加者に対して個別にプレイバック・セッションを行った。まず研究の趣旨を説明し参加者に協力を求め、その後、録音会話を聞いてもらい、会話時の意識を話してもらった。その際の使用言語は基本的に日本語であったが、留学生が中国語を希望した場合には、筆者と会話参加者の他に、中国語を母語とする通訳者が立ち会った。

(2) 分析方法

① 好意的・非好意的に評価される会話行動

留学生のどの行動が日本人学生に好意的・非好意的に評価されるか、反対に日本人学生のどの行動が留学生に好意的・非好意的に評価されるかを明らかにするため、プレイバック・セッション中の発言を分析した。プレイバック・セッションでの会話参加者の発言のうち、相手の会話行動を評価するものを選び出し、それらを内容分析の手法で類型化した。

まず、個々の発言が相手の会話行動を評価するものかどうかの判断は、筆者ともう一人のコーダーで行った。それぞれが別々に判断し、二者間で判断が一致したものだけを取り出したあと、それらを相手の会話行動に対する(1)好意的評価(2)非好意的評価(3)その他の評価に分け、さらにその趣旨に基づいて下位分類した。まずは筆者が分類し、その作業途中で分類カテゴリーに対する命名を行った。その後、カテゴリーの定義、解釈の基準、分類方法などを記したマニュアルと

分類した結果を記入するコーディングシートを作成し、もう一人のコーダーにも分類してもらった。判断の不一致箇所については、最終的にはコーダー間の話し合いによってどちらかに統一した。

② 中級者と上級者の会話行動の違いと母語話者の会話行動への影響—情報要求発話とそれに続く発話連鎖の場合—

中級者と上級者の会話行動の違いと、それが母語話者に与える影響を明らかにするために、同文化間会話、中級者との異文化間会話、上級者との異文化間会話における母語話者の情報要求発話とそれに続く発話連鎖を分析した。

先行研究によって、初対面会話において互いについての情報交換は「(1) 質問→ (2) 相手の応答 (self-presentation) → (3) 承認等」という発話連鎖で行われることが指摘されている。第一ターンで、母語話者である参加者が質問し、第二ターンで相手(母語話者、中級者、上級者)が答え、それを受けて、第三ターンで質問者が承認したりコメントしたりする。では、この後の第四部分で、相手はどのような行動をするのであろうか。更なる関連情報を追加すれば話題に発展し、話し合いスタイルになるであろうし、反対に、「うーん」など承認発話にとどめ、ターンをパスしたら、活発な話し合いには発展せず、沈黙が起こるかもしれない。また、沈黙を避けるため、次の質問に移り、インタビュー・スタイルになるかもしれない。第四部分は、会話進行のスタイル決定に関わるという点で重要である。そこで本研究では、同文化間会話、中級者との異文化間会話、上級者との異文化間会話において、母語話者からの質問を受けた母語話者、中級者、上級者のそれぞれが応答に続き、第四部分でどのような行動をするのかを分類し、比べる。さらに、第四部分での行動の影響を受けて、上記の3種の会話で、母語話者が自らの行動をどう調整するかを明らかにする。そのために、母語話者による情報要求発話の出現数の変化を調べる。

③ 会話の雰囲気を良好に保つための母語話者のストラテジー

まず、日本語母語話者が会話の雰囲気を良好に保つためにどう行動するかを明らかにするために、同文化間会話参加者のプレイバック・セッション中の発言を分析した。発言のうち、友好的で話しやすい雰囲気作りのために行った行動に関するものを選び出し、それらを内容分析の手法で類型化した。コーディングにあたっての手続きは、「① 好意的・非好意的に評価される会話行動」と同じである。

次に、会話中、参加者の一方が相手の言動

を不愉快に感じるなど何らかのネガティブな気持ちになり、相手もそれに気づき、問題が顕在化した場合に、会話の雰囲気を損ねないように、その問題をどう解決するかを詳細に観察する。プレイバック・セッションでの参加者の発言から問題箇所を特定したあとで、発話内容、発話機能、韻律的特徴や発話のタイミングなど微細な特徴に注目し、繰り返し現れるパターンを探した。

4. 研究成果

(1) 好意的・非好意的に評価される会話行動

① 日本人学生により好意的・非好意的に評価される留学生の会話行動

内容分析の結果、日本人学生によって好意的・非好意的に評価された留学生の会話行動を11の類型に分けることができた(表-1、表-2)。

類型ごとの発言回数を対象(中級者・上級者)別に見ると、留学生の口頭能力レベルに関わらず、日本人学生による評価には同じような傾向が見られた。しかし日本人学生の個々の発言を質的に見ると、会話進行への関与等に関して、留学生の口頭能力レベルに応じた差も見られた。

表-1 日本人学生に好意的に評価された留学生の会話行動

会話行動の類型	下位項目
A)自己開示	1)自分自身や自分に関係があることがらについて、積極的に情報提供する 2)自分の個人的意見を言う
B)相手への関心表示	1)相手自身や相手に関係があることがらについて色々話をむける 2)相手の話を熱心に聞く
C)相手への共感表示	相手への共感をことばで言ったり、態度に表したりする
D)相手の呼び方	名前を呼びかける
E)ほめ	相手や相手に関係があるものをほめる
F)真意の明示	
G)表現の豊かさ	
H)会話進行への関与	1)適量の発言をする 2)話題を提供する・発展させる 3)適切な話題を選ぶ 4)会話進行を阻む問題を積極的に解決しようとする
I)日本語の熟練	1)正しい聞き取り・理解 2)理解できる話し方をする 3)自然な話し方をする 4)適切なスピーチスタイルを選ぶ
J)非言語行動	1)望ましくほほえむ 2)笑う 3)望ましい外見的特徴がある 4)望ましい視線の配り方をする 5)その他、望ましい非言語行動
K)その他	

表-2 日本人学生に非好意的に評価された留学生の会話行動

会話行動の類型	下位項目
A)自己開示	
B)相手への関心表示	1)相手自身や相手に関係があることがらについて話を向けない 2)相手の話を熱心に聞かない
C)相手への共感表示	2)相手への不同意をことばで言ったり、態度に表したりする。
D)相手の呼び方	
E)ほめ	
F)真意の明示	1)真意をはっきり示す・直接的な表現を使う 2)真意をはっきり示さない・直接的な表現を避ける
G)表現の豊かさ	表現の乏しさ
H)会話進行への関与	1)発言量が多すぎたり少なすぎたりする 2)話題を提供しない・発展させない 3)不適切な話題を選ぶ 4)会話進行を阻む問題の解決に消極的になる
I)日本語の熟練	1)不正確な聞きとり・理解 2)理解できない話し方をする 3)不自然な話し方をする 4)不適切なスピーチスタイルを選ぶ 5)不明瞭な発音をする
J)非言語行動	1)望ましくほほえない 2)笑わない 3)その他、望ましくない非言語行動
K)その他	

② 留学生により好意的・非好意的に評価される日本人学生の会話行動

内容分析の結果、留学生によって好意的・非好意的に評価された日本人学生の会話行動を11の類型に分けることができた(表-3、表-4)。

類型ごとの発言回数を中級者・上級者別に見ると、上級者によって好意的に評価されていたのは、日本人学生が進んで自身について語ったり意見を述べたりすること、留学生自身や出身国などについて質問すること、留学生の話に驚きの反応をしながら熱心に話を聞くこと、その話の中に留学生との共通経験を見つけ、それに言及する行動などであった。反対に、これらの行動が期待されている場面でそれが欠けている時に、日本人学生を非好意的に評価していた。

一方、中級者は沈黙を避け、適切な話題を選びそれを膨らませること、誤解等の問題を早急に解決し会話が滞らないようにすることを重視しており、そのための日本人学生の貢献を好意的に評価していた。

さらに、中級者には、日本人学生の表現の豊かさを新鮮に感じているという特徴も見られた。日本人学生が会話を楽しいものにするために擬音語・擬態語を使用したり、同じことばをくり返して強調したり、音韻的操作をしたり、ゼスチャーを付けながら大げさに語ったりする行動が好意的に評価された。

表-3 留学生に好意的に評価された日本人学生の会話行動

会話行動の類型	下位項目
A)自己開示	1)自分自身や自分に関係があることがらについて、積極的に情報提供する 2)自分の個人的意見を言う
B)相手への関心表示	1)相手自身や相手に関係があることがらについて色々話をむける 2)相手の話を熱心に聞く 3)相手や相手に関係があることがらについて、既知していることがあれば、それに言及する
C)相手への共感表示	1)相手への共感をことばで言ったり、態度に表したりする 2)相手との共通点に言及する
D)相手の呼び方	
E)ほめ	1)適度にほめる 2)相手の日本語をほめる 3)日本や日本人になじんでいることをほめる 4)その他のことらについてほめる
F)真意の表明	真意をはっきり示さない・直接的な表現を避ける
G)表現の豊かさ	表現の豊かさ
H)会話進行への関与	1)適量の発言をする 2)話題を提供する・発展させる 3)適切な話題を選ぶ 4)会話進行を阻む問題を積極的に解決しようとする
I)話し方の特徴	1)適切なスピードで話す 2)明瞭な発音をする 3)適切なスピーチスタイルを選ぶ 4)相手がよく知っている言葉を選んで使う 5)理解できる話し方をする
J)非言語行動	1)望ましくほほえむ 2)望ましい外見的特徴がある 3)望ましい視線の配り方をする 4)笑う
K)その他	

表-4 留学生に非好意的に評価された日本人学生の会話行動

会話行動の類型	下位項目
A)自己開示	1)自分自身や自分に関係があることがらについて、積極的に情報提供しない 2)自分の個人的意見を言わない
B)相手への関心表示	1)相手自身や相手に関係があることがらについて話をむけない 2)相手の話を熱心に聞かない 3)相手や相手に関係があることがらについて、何も知らないということを言ったり、態度に表したりする
C)相手への共感表示	
D)相手の呼び方	不適切な呼び方をする
E)ほめ	過剰にほめる
F)真意の表明	1)真意をはっきり示さない・直接的な表現を避ける 2)真意をはっきり示す・直接的な表現を使う
G)表現の豊かさ	
H)会話進行への関与	1)発言量が多すぎたり少なすぎたりする 2)話題を提供しない・発展させない 3)不適切な話題を選ぶ
I)話し方の特徴	1)不適切なスピードで話す 2)不明瞭な発音をする 3)不適切なスピーチスタイルを選ぶ
J)非言語行動	1)望ましくほほえない 2)望ましくない外見的特徴がある 3)望ましくない視線の配り方をする
K)その他	

(2) 中級者と上級者の会話行動の違いと母語話者の会話行動への影響—情報要求発話とそれに続く発話連鎖の場合—

① 中級者と上級者の会話行動の違い

同文化間会話、中級者との異文化間会話、上級者との異文化間会話において、母語話者からの質問を受けた相手（それぞれ母語話者、中級者、上級者）の第四部分での行動を分類したところ、次の二点が明らかになった。第一に、相手の発話を受け、「うん」「そうそう」などと短い受け答えだけする承認・同意の比率は、「母語話者<上級者<中級者」の順に増える。一方、積極的に関連情報を追加し、話題に貢献しようとする行動は同じ順で減っていく。学習者、とりわけ中級者に関連情報の追加が少なく、承認・同意のみで、ターンを積極的に保持しないため、その相手である母語話者が更なる情報要求を行うことになり、インタビュー・スタイルの会話になると考えられる。一方、同文化間会話では、一つの情報要求をきっかけに、会話参加者双方から自主的な情報提供が行われるため、話題に発展し、話し合いスタイルの会話になると考えられる。

第二に、学習者は関連情報を加える際に、「うん」「そう」などと一旦承認・同意するのに対し、母語話者は関連情報のみを提供し、テンポよく会話を進めていた。学習者は承認・同意をしている間に次の発言内容等を考えているためこのような差が生じることが考えられるが、その分、会話のテンポの良さは損なわれる。

② 会話相手による母語話者の会話行動への影響

3種の会話それぞれにおける、母語話者一人当たりの情報要求発話数を見ると、母語話者同士の会話に比べ、学習者相手の会話で母語話者はより多くの情報要求発話をしていることが分かる。また、上級者相手の場合に比べ、中級者相手の場合にさらに増加する。上記のとおり、学習者は母語話者からの質問に答えたあと、関連情報を加えることが少ないため、会話相手である母語話者が更なる情報要求を行うことになるためであろう。

(3) 会話の雰囲気を良好に保つための母語話者のストラテジー

① 会話の雰囲気を良好に保つためのストラテジーの種類

母語話者が友好的で話しやすい雰囲気作りのために使用していたストラテジーを、A～Gの7つのカテゴリーに分けることができた(表-5)。分析の結果、初対面状況での会話を続けるにあたって、日本語母語話者はさまざまな側面に配慮していることが分かった。その中で、本研究のデータに特に多く見

られたのは、会話進行、話の内容、相手との共通部分の表示に関わるストラテジーであった。

表-5 会話の雰囲気を良好に保つための母語話者のストラテジー

ストラテジーの種類	下位項目
A)相手への関心表示に関わるストラテジー	1)相手について話をむける
	2)同じ質問を相手に返す
	3)相手の発言を無視せず反応する
	4)相手の話に大きさに反応する
B)相手との共通部分の表示に関わるストラテジー	1)相手との共通点を探す
	2)共通点や共有知識について言及する
	3)相手との認識の一致や共感の気持ちを伝える
	4)相手に対する不同意や批判的な気持ちを隠す
	5)相手や相手に関係のあるものごとの価値を認めていることを伝える
C)自分についての情報の出しかたに関わるストラテジー	1)相手に聞かれる前に自分自身について話す
	2)自分自身を控えめに評価する
D)話の内容に関わるストラテジー	1)相手にとって好ましい話題を選ぶ/発展させる
	2)相手が話しにくい、聞きたくないと考えられる話題を避ける
	3)自分が話したい話題よりも相手が話したい話題を優先する
	4)自分にとって話しにくいことでも相手が知りたいなら話す
	5)自分が正しく情報提供できる話題を選ぶ/発展させる
	6)おもしろく話す
	7)冗談を言う
E)会話進行に関わるストラテジー	1)自分の発言量を調節する
	2)沈黙を避ける
	3)話題の流れに従う
	4)相手の発話に割り込まない
	5)相手の意味が完全には理解できなくても会話を進める
	6)会話進行のために必要な情報を集める
F)相手との関係表示に関わるストラテジー	1)自分のスタイルを調節する
	2)相手の呼び方を調節する
G)その他	(非言語行動等)

② 会話の雰囲気を壊す可能性のある問題の修復

会話中に会話参加者の一方が、相手の言動を不愉快に思ったり、相手に共感できないと感じたとき、何らかの理由でそのネガティブな気持ちが顕在化し、参加者双方に認識されることがある。そのような場合、双方が気付いていないふりをしてやりすごすこともあるであろう。しかし、会話の雰囲気が悪くならないようにするために、参加者双方が協力してその問題を修復しようとすることもある。そのような場合に、不愉快な思い等をした側とその相手がどのように協力して問題を修復し、会話の雰囲気を良好に維持しているのかについて述べる。

不愉快な思い等をした側の行動には、次の二つが見られた。(1) ネガティブな気持ちを

表明しながらも、自分が感じた問題は些細なものにすぎないことを述べる「些細な問題扱い」と、(2) 通常よりもいきいきとふるまい、会話を盛り上げる「会話の愉快さの強調」である。会話の愉快さを強調するための手段としては、笑い、直接引用によるドラマ作り、ユーモア発言がくりかえし観察された。

一方、その相手側の行動にも「会話の愉快さの強調」が見られた。笑い、直接引用によるドラマ作り、ユーモア発言をすることによって、相手と協力し、会話を盛り上げていた。会話の雰囲気を損ねる問題を解決するためには、参加者双方の協力が必要である。不愉快な思い等をした側が会話の雰囲気を愉快にしたのと同じやりかたで相手も応え、協力することによって、良好な会話の雰囲気を維持することができるし、お互いに良い印象を与えあうことにもつながるであろう。

(4) 本研究の意義と今後の展望

本研究は、留学生と日本人学生の実際の会話を分析することによって、両者の親密化を促進・阻害する可能性のある会話行動の一側面を明らかにすることができた。本研究によって、異文化間会話には留学生と日本人学生の親密化に関わる要素が数多くあり、今後研究を続けていくべき領域であることが示されたのではないかと考える。留学生と日本人学生の友人関係形成に関する研究はこれまでに数多く行われてきているが、実際の会話をデータとし、会話行動を検討した研究はまだ十分ではない。友人関係の形成は実際のコミュニケーションの積み重ねによって起こるものであるため実際の会話中に何が起きているのかを解明していく必要があるであろう。

また、本研究にはソーシャルスキル・トレーニングや日本語教育教材開発のための基礎研究としての意義もある。留学生と日本人学生が友人関係を形成することは、両者にとって意味深いことである。留学生にとって日本人の友人を持つことは、日本語学習に必要なインプットやアウトプットの機会を留学生に与えてくれるだけでなく、留学生が日本人や日本社会を理解するのに役立ち、また留学生活のストレスを低減させてくれるであろう。また、日本人学生の側にとっても、留学生の友人を持つことは重要である。留学生との交流は日本人学生の中に異文化を受け入れる心を育ててくれるし、日本人学生が自らの文化に気づくという意味でも意義深いものである。このように留学生と日本人学生の友人関係形成は重要であるため、両者の親密化に困難が伴うのであれば、必要に応じて会話時の行動に関するソーシャルスキル・トレーニングや日本語教育を行うべきであろう。本研究の結果は、その教材開発のため

めに活かせるのではないかと考える。

しかし、本研究だけで教材開発のための十分な基礎研究ができたとは言えず、今後も研究を続ける必要がある。まず、今回の研究で明らかになった現象の一つ一つの詳細な観察をする必要がある。また、雑談場面に限らず、留学生と日本人学生のさまざまな出会いの状況を調査の対象としなければならないであろう。さらに、既存の教材の分析を行うことによって、何を補うべきかを考えていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 4 件)

(1) 大津友美、「初対面会話における日本語母語話者の情報要求発話」、第 31 回日本語教育方法研究会、2008 年 9 月 20 日、愛媛大学

(2) 大津友美、「留学生は日本人学生の会話行動をどう評価するか」、第 11 回日本語教育学会研究集会、2009 年 3 月 7 日、同志社女子大学

(3) 大津友美、「日本人学生による留学生の会話行動の評価-中国語を母語とする中級・上級日本語学習者との初対面会話の場合-」、第 32 回日本語教育方法研究会、2009 年 3 月 21 日、神奈川大学

(4) 大津友美、「会話の雰囲気を良好に保つための行動-女子大学生の初対面会話の場合-」、第 23 回社会言語科学会研究大会、2009 年 3 月 28 日、東京外国語大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大津 友美

東京外国語大学・留学生日本語教育センター・講師

研究者番号：20437073

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者